

集

俳句フォーラム

2005年4月 第15号

あけぼの句会

樹氷 田村時与

初雪や妻を娶りし子の新居
山の無き在所寒風吹きまくる
雪畑吾子遊ばせし娘の細身
風立ちて光彩散らす樹氷かな
初旅や犬をあずけし事の憂き

臍の緒の箱 大森桂子

初明り書架に眠りし五億の句
元朝の光調う膝頭
初春の銀座で買いし住所録
子に渡す臍の緒の箱せりなずな
強霜や車道を犬のひた走る

とりとめのない 浦川哲子

提灯の点る参道年用意
故郷は根雪とりとめのない話
あらたまの懐深き井戸茶碗
淑気満つカクテルの名はマンハッタン
朝刊のごとりと落ちる冬の底

俳句雑感

姉のこと 田村時与

私には九つ違いの七十二歳の姉がいて、健在です。
昨年の九月までは勤めに出て、バリバリと働いていま
した。今は、現役中から続けている朗読の会に参加す
ることで、日々の張りを得ているようです。男性の多
い仕事場から、主婦など女性層の会で戸惑うことも沢
山あるかと案じている昨今です。

諸の花独り身通す姉のいて 時与

有楽町メセナ句会

デッドソルジャー 岡田芳べえ

哀れ蚊の衿にまどろむ旅の朝
雨止んで金木犀は地に香る
秋の坂青鞞のひとかけあがる
古酒呷るふいに韓国語を発す
新酒整列デッドソルジャー（廃瓶）累々

初天神 伊嶋淡々

凧や欠礼の文言考える
マンションに人吸い込まる冬灯
眼閉ざす白梟の白昼夢
うそ っと長く伸ばして初天神
噓して四百年の松の風

食べる 八木蝉息

突つ走る丹下左膳のサンングラス
馬冷やす三郎がゐてポチがゐて
目の端に秋がひよっこり来て笑ふ
見えすいた言訳ならべ 翳雲
ふるさとや食べる食べると栗御飯

とんがらし 岡本久一

さびしさや男はイチローだけの秋
とんがらし高齡という反抗期
ふんだんに自由と孤独冬の丘
こがらしの骨を拾ひしビルの街
犬あての年賀はがきの当りけり

潜水艦 霧野萬地郎

遠火事や二重瞼の猿のボス
その影を霧に浮かせて死木立つ
栗毬を挟むダビデの投石器
潜水艦河豚一匹を追いかけて
洗濯の渦に溺れるちゃんちゃんこ

湯けむりごし

根本随縁

熊野路や湯けむりごしの冬木立
イルカ翔ぶピエロよろしく冬日浴び
竹撓む雪やこんこん降りやまず
年の瀬や山並み照らす月まどか
雲つき観音詣で母偲ぶ

白鳥来る

森須 蘭

アスピリンよく効いている大枯野
関節の糸抜く疼き白鳥来
無秩序な君の背中という枯野
噓して空の鱗の剥がれきる
背筋に疲れ溜まっています水仙

冬 靴

樋口愚童

若者たちの疎髯ふわふわ希典忌
獲の夢すきやき鍋が頭上に墜つ
鷺吹くか才カリナ吹くか嫁が君
I T を蔑視する罪寒卵
折疊式の悲しみを冬靴

小論

有季と当季

樋口愚童

はじめにお断りしておくことがある。このテーマすなわち俳句における「季語」の必然性については、小生いまだに「および腰・屁っぴり腰」の態度から脱しえないのである。全面的に肯定するのならそれで論理を通し得るし、全面的に否定するならそれはそれで論理を通せるだろう。しかし「屁っぴり腰」では両論併記の審議会答申みたいな中途半端な論旨にならざるをえないのである。

まず「有季定型」を標榜する伝統俳句、すなわち虚子ノホトトギス派の俳句理論では「客観写生」「花鳥諷詠」「季題趣味」を唱える。これなら俳句が有季性・当季性を必須要件とするのは理解できる。客観写生であるから、その事実が観察され句が制作された時点は特定されており、観察・制作時(季)を「季語」という象徴語で作品に書き込むのに何の不自然もない。「花鳥」というのは季語の美称であらうし、「季題趣味」に

いたつては時空間の表象としての「季語」の本意を詠むのが俳句の本質、たということであろう。俳句の重心に季語がデンと鎮座するわけである。

この伝統俳句に対抗して興った「新興俳句」は、まず客観と生主義からの脱却と、詩性の復権を唱える。事実の客観的記述・描写などは検察庁の調書かテレビ屋の報道番組にでも任せておけばよいではないか。世間さまから強制されるさまざまな約束ごと・規制・桎梏からはみだすものの表現が芸術というものではないか。特に「詩」というジャンルは、世間さまと自己との間の最大の約束ごとのひとつである。「言語」を介して、世間常識に反逆しようというパラドックスを孕んでいる。通常の言語感覚からは「唐人の寝言」に類するアクロバティックな表現が多用されるのも必然であろう。

わが国俳壇におけるこの新興俳句運動の背景に、ポードレール、マラルメ、ヴァレリーなどフランス象徴詩に始まり、戦前戦後のシュールリアリズム/ダダイズム運動などヨーロッパ詩壇を席捲した詩の純化ブロードセブがあったことは確かであろう。

新興俳句派はその一部に「無季俳句」を提唱しました実行したが、かといって反ホトトギス系俳人がこぞって無季俳句に傾いたわけではない。客観と生は捨てて

も有季性は捨てきれなかったのである。なぜか、句の重心に季語を置くという構造形式の安定性と季語群のもつ詩語としての魅力をそれなりに評価したのである。小生の季語観もまあそんなところである。

有季定型でなければいかんと強制されると反発したくなるが、実際に作っている句はほとんど有季定型である。でもたまには無季句もある。

善男善女が三拝九拝するケータイ

この句のどこに季語が入れ得るか。今どきの老若男女春夏秋冬三百六十五日・二十四時間のべつまくなしにケータイを礼拝しているではないか。

さて話を「当季」の方に移そう。「当季」とは句会ないし句誌に投句する新作句は、有季俳句を前提として、投句時点の属する季を盛った句でなければならぬとするノルムである。

句誌の句会・投句案内には多く「当季雑詠×句」とある。最近まで何てこともなく見過ごしていたが、これはどついつことなのかと考えだしたのは、小生の関係する月例会会のことである。

小生が例によって「季のずれた句を出したっていいじゃないの」と愚問を呈したところ、皆さんの総スカンを食った。座の主宰はやっぱり「出していかんと

いっことはないけど、誰も採ってくれないでしょう」
とのつれない態度。

どつも納得できない。夏場の句会に、天下にかくれ
もない名句「初時雨猿も小裘をほしげなり」に匹敵す
る冬季の傑作句を出しても、誰も振り向いてくれない
といつのはどつという訳か。写生主義を捨てた俳句であ
れば、冬場に夏の句が、夏場に冬の句が出来たってち
つともおかしくない。ある句想が浮かんだとき、この
句は違った季に仕立てた方が適切だと思つことも往々
ではないか。などと頭をひねつたあげく、やっと思い
ついた。

小生はそれまで句会（句誌）というものをあさはか
にも、単純に連衆による俳句の互選の場と考えていた
のである。そこではないのだ。句の有季を前提とする
句会（句誌）の眼目の筆頭は自明の公理として、その
時点で連衆が共有する時空間への頌辞を唱和するセレ
モニーなのである。句会に出される句はすべて挨拶
語・合い言葉、すなわち「お早々（さ）いませ」「お寒
（か）いませ」「を、作者それぞれが独自にリファイ
ンさせた唱和詞なのだ。唱和本位主義日本人文化の見事
な発露である。だから「当季」性の方が先で、「当季」
を総称したものを「有季」と呼ぶことになったのだろ
う。

こんなことが頭をひねらなければ理解できないと
ころが、挨拶もろくにできない「愚童」の「愚」にし
て「童」たる所以であり、日本文化音痴・国籍不明の
ポリネシアンと評される所以なのである。

最後に有季と当季についての現在の小生のスタン
スをとめておく。

有季・当季をこんなふうに、他人ごととして「文化
人類学的に」仮説化できても、自分の句作・投句行為
において、この仮説をそのまま追隨する気にはなれな
い。

有季要件すなわち季語に関しては、その季語が詩語
として美しく最適な語彙であり、かつ句の重心として
構造的につまぐ機能するかぎりにおいてこれを尊重す
る。当季要件については、唱和嫌い・対話主義を奉ず
る小生として論理的には納得できないが、こんなこと
でいたずらに周りの方々とトラブルのも大人げない話
であるから、季のずれた句ができた場合は製品在庫と
して貯蔵しておき、当季の到来を待つことにしよう。

季の会

冬に入る

小林晋子

ダム紅葉乾パンの味お茶の味
風葬の鉢山実いばらの棒立ちに
はらからは一男四女干大根
メモ帳に七つの不思議冬に入る
人声も時雨も聴いて「眠り猫」

干大根

佐藤稲詩

弟が巡礼に発つ秋日和
民宿の軒が目安の干大根
鱒に沸く外海は波荒し
番屋より豊漁の宴鱒来

娘に季節を送り年用意

季語辞典

板倉工三

残る虫見回る人の鍵の束
真つ白なシクラメンです幸せです
居心地の良い場所軒の干大根
冬めくや菜の目立つ季語辞典
茶を運ぶ無口な男空小春

干大根

川口松生

山の名は誰がつけしか花野行く
山がらす嘴を磨いて柿を食う
干大根母の吊した軒の釘
羽織るもの鏡の前に十二月
老犬の座布団替えて年用意

峰に雪

小塚嘉人

野も里も花野につづく道となり
どこまでも匂い残して刈田かな
干大根昔の味が消えてゆき
梅もどき雪を抱いてまだ赤し

白樺の肌を透かして峰に雪
冬至くる 佐藤利夫

天高く飛び立つ気球海に融け
黄落やひらりひらりと我に舞う
古の柱に集う後の月
風の息して眠れぬ夜冬至くる
年用意まずは葉書の手配して

年用意 村井節子

留守の家地べたに一つ南瓜かな
地酒一本師の家へ急ぐ夕花野
冬めくや居酒屋の鍋ふつつと
病む母の涙こぼれる曇なり
薪小屋にすぎ間なく積み年用意

九月の星 藤嶋まさと

神宿る山へ九月の星溢れ
溜息が沈黙となる九月の田
着ぶくれや生涯とれぬ村訛
草紅葉かくかく笑う膝がしら

足首に疲れが溜まる霧の街
句評

季の会読後片片(12) 集第十四号作品より

藤嶋まさと

今年には雪が少ないのではないかと思っていたら、予想に反し、ここ一週間ぐらいの間に例年と変わらない積雪量になってしまった。

朝五時頃になると除雪車がやってくる。その首で目覚めるが、妙に除雪車の音に神経がピリピリして、その音の大小によって降雪の多少を考え、除排雪に要する時間などを頭の中に思い巡らすのである。これが雪国に住む者の宿命なのかも知れないが、そんなことに神経を消耗しなければならぬことがやりきれない。そんな生活体験があるから、実感のある雪の句を作ることが出来るのだという人もいるけれど、雪に振り回されている当の本人のとしては、そんなことはも何か虚しく聞こえてならない。

丁寧に包む松茸ふるさと便 晋子

近くに松茸の産地がある。年間どれ位の収穫量があるかは解らないが、関係者以外は入山禁止で、一般人は自由に穫ることは出来ないということである。

松茸というと茸の王様と言われ、高価な茸である。それだけに丁寧に包まれ、ふるさと便として、ふるさとを遠く離れている人たちに届けられるのであるが、ここには送る人とそれを受ける人の心の温もりが秘められていて、その温もりが読む人にまで伝わってくる。これはさりげない表現の中にも、その素材を十分に生かした所にあるものと思つた。

台風が来るかも猫が爪を磨く 稲詩

おもしろい句である。この句の「台風が来るかも」ということと「猫が爪を磨く」ということは何の因果関係もないものと思つた。それでいて二つを結びつけると一句として成り立っているのである。結びつける役目をしているのは何かといつと、それは作者である。「台風が来るかも」と思っているのは作者であり、「猫が爪を磨く」のを見ているのも作者である。そしてあたかも「台風が来るので、猫がその前ぶれとして爪を磨いているのだ」と読み手に思わせてしまつたのである。句としての良し悪しは別として、このよつな発想でも

句を作ることが出来るのだということを示した一句である。

夜の読書冷蔵庫から洩れる音 工三

句意からすると、夜に読書をしていると、冷蔵庫からかすかに音が聞こえて来たということであり、ごく身近な生活の中から素材を得て作品化した一句である。読書をしている人の位置と冷蔵庫との距離はどれ位あるかは別として、今まで読書に集中していた心が、冷蔵庫の突然の変化に気づいて、瞬時ではあるが心がそちらに向けられたのである。すなわち、目は本に、耳は冷蔵庫に向けられているのである。かすかな音が聞こえて来た夜の静けさもあるが、日頃、冷蔵庫と密接な関係をもっている主婦感覚が働いた一句といつたことになる。

ひぐらしや街角おんな占い師 松生

都会などでは夕暮れともなると、街角に辻占いがいて運勢を占っているのをよく見かける。この句の場合には、その占い師が「おんな占い師」であり、それが季語の「ひぐらし」と一体になって句の連想を深めているのである。季語は単なる約束ごととして使われているのであれば、作品の内容に豊かさは生まれて来ない。一句の表現の中にどつ生かして使うかによって、句の

連想が無限に広がってくることになるのである。この句の場合も「ひぐらし」が、日暮れに鳴くという単なる時間的なことだけでなく「ひぐらし」そのもののイメージから「おんな占い師」の年代、容姿、動作、強いては人柄までも想像させてくれるのである。それが俳句の句意の深さと、広がり結びつくことになってくるのである。

風化する碑一基青葉しむ 嘉人

碑は一つの記念碑として建立されるわけだが、時の流れの変化によって、誰も見向きをしなくなるものも多い。この句の「風化する」は、実際に風化している碑なのか、建立の意義が時代に合わなくなって意義が風化していることなのか、二つが考えられるが、私としては後者をとりたい。その理由は、崩れかけた碑と「青葉」の対比では写生的で句意に深まりがなく、碑は現存しているが、その建立意義が時代の流れに合わなくなつて風化している方が、「青葉」と対比して句意に深まりが生まれてくるからである。果たしてどちらがいいものか。

夏の果海峡渡る優勝旗 利夫

いつまでもなく、昨年の高校球児の甲子園大会で、

北海道代表の駒沢大付属吉小牧高校が優勝し、初めて優勝旗が津軽海峡を渡ったことを句にしたものである。東北・北海道の高校野球ファンにとつては、優勝旗が白河の関を越えることが一つの悲願であった。それが一気に津軽海峡を渡ったのである。このことは全くの快挙であり、悲願の達成でもあったのである。「夏の果」は、そんな悲願の果であり、日本列島の果である北海道をも表現しているのである。

作品としてはやや事実の報告になつてしまつた感じもする。

焼酎の湯割り一杯冷奴 節子

句意は一読して理解することが出来、季語の「冷奴」も句の中で十分に生かされている。これは、確かな目で生活を見つめていることによるものであり、実感の伴つた句を生み出している要因ともなっている。

ただ、自分の生活の範囲からだけでは、作品の傾向に広がりがなくつてしまつ。生活の範囲を狭めて深まりをもつことも大事だが、外に目を向けて広がりをもつこともまた大切なことである。

